

素材の豊富さと保育者を目指す学生の発想の関連について

——「あとリエ」活用の授業実践とその意義の考察——

安藤 則夫^[1], 植草 一世^[2], 園川 緑^[3]

[1] 植草学園大学発達教育学部, [2] 植草学園短期大学福祉学科, [3] 帝京平成大学現代ライフ学部

これまで、豊富な素材が配列された素材庫が、幼児にもたらす影響について研究してきた。その結果、多様な素材が幼児の発想を豊かにし、遊びを発展させ、様々な個性をもった他児との関わりを深めるのに役立ち、インクルーシブ保育の実現に貢献することを確認した。今回は、素材庫を活用した大学生と活用しない短大生の「保育の表現技術」の授業に対する取り組み方をアンケート調査によって比較した。その結果から、素材庫が学生に与える影響を分析し、保育者養成における素材庫の意義について考察した。素材庫を活用することで、学生の選択肢が増し、多様な広範な可能性の受け容れも考慮できるようになった。また、自分に合った選択ができることで授業に対する積極性も高まった。多様性への気づきと多様な可能性の受容は、インクルーシブ保育を行うための重要な資質である。素材庫の活用は、学生の資質向上に貢献すると期待される。

キーワード：豊富な素材の素材庫、豊かな発想、授業に対する積極性、保育者の資質、インクルーシブ保育

1. はじめに

1.1 自分に合った活動が見つけれられる素材庫

本研究者は、インクルーシブ保育を実現するためには、幼児が多くの発想を生み出せる場の設定が大切であると考えてきた。多くの発想ができる場があれば、どのような個性をもった相手に対しても、相手の立場を認めながら自らの力を十分に発揮できる。また、豊かな発想を生み出せることで、他児との連携も容易になると予想した。

そのために、地域ぐるみで素材を収集し、素材庫を通じて様々な素材を子どもに提供しているレッジョ・エミリアのアトリエの考え方を参考に、2016年U大学附属幼稚園に、幼児が自由に入出入り出来る様々な素材を並べた「素材庫」を作った。なお本稿では「素材」という語を、「目標となる作品を構成する部分となる材料」という意味で使用する。

その結果、素材庫の素材に触発されて、幼児は予想通りに様々な遊びを生み出し、活動の場を広げ、様々な個性をもった他の幼児も巻き込む活動を展開させることがわかった(植草, 2016)。つまり、選択肢を多様化し、それを元に発想することで、異なる個性をもった他の幼児を巻き込むインクルーシブ保育が実現しやすくなるということである。

このような幼児の姿を直接見ることで、保育者や保育者養成大学(以下、大学と記す)の保育者を志望する学生も意欲をもち、素材の用意の仕方を工夫したり、幼児への提案の仕方を積極的に考えたりするようになった。また、未経験の保育士や学生も、幼児の具体的な姿が思い浮かぶエピソード記録を共有することで、素材に対する認識を深めることができることが示された(植草ら, 2017, 植草・安藤, 2018)。

1.2 素材庫に影響される学生

幼稚園の素材庫のために、学生も素材の収集に参加するようになり、大学にも収集の場としての素材庫が必要になった。そのために部屋を確保し、素材を収集し、素材を見やすいように配置して、2017年に素材庫「あとリエ」を設置した。この素材庫は、幼稚園のために素材を収集する役割だけでなく、多様な素材が活用できることで、3,4年生の教材研究に役立つという役割も果たしている（植草ら、2017）。

大学に素材庫「あとリエ」ができたことで、学生も素材庫の影響を受けていることがわかった。

1.3 学生にも大切な発想の豊かさ

素材庫があることで、幼児ばかりでなく、学生の発想も豊かになることがわかってきた。教師から教えられるのではなく、学生自らが素材から多様な発想を生み出していくことは、近年、学生の能動的、主体的活動が重要であるとする（中央教育審議会、2012）流れにも合致するものである。もし、素材庫に学生の発想を豊かにし、保育活動の準備に対する積極性を生み出す力もあるとすれば、素材庫は、保育士養成上も重要な役割をもつことになる。

そこで、今回の研究では、保育士養成における素材庫のもつ学生にとっての意義を明らかにしたいと考えた。対象は、素材庫を活用した大学生と活用しなかった短大生である。この両者にアンケート調査をすることで、造形素材を使用した授業への取り組み方を調べ、素材庫の影響力やこれからの可能性について考察することとした。なお素材庫は、保育に役立ちそうな身近なモノを学生に協力してもらい集め、並べた場所である。特定の保育活動を想定せず集めているので、種々雑多なものがある。

今回の研究について具体的に述べると、授業「保育の表現技術（言語表現）」（以下、授業と記す）の受講者（大学と短大の1年生）に対して、授業の中で子どもに向けたミニシアター発表の準備とその発表を行うことを課題として提起した。対象は、大学生・短大生共に1年生であり、授業は前期に行なわ

れたので、授業でのミニシアターに関する経験はそれまでになかった。

素材に関しては、大学生・短大生共に家から必要と思われるものを持ってくるよう指示した。条件の違いは、自宅から持参した素材以外に、大学生は素材庫の中の素材を選び活用することができたが、短大生の場合は、教員が用意した画用紙だけ使うことができたということである。ミニシアター発表の活動を終えた後でアンケート調査を行い、学びをスタートさせたばかりの学生に及ぼす素材庫の影響を分析し、保育士の質的向上に役立つ点を考察し、「あとリエ（以下、素材庫）」の今後の活用の意義を明らかにしていくこととした。

2. 方法

2.1 アンケート調査

(1) 調査対象：授業「保育の表現技術」を受講する1年生（平均年齢19歳）：大学生83名（女性70、男性13）、短大生97名（女91、男6）。

(2) 調査日：2018年7月23日（月）

(3) 場所：U大学多目的演習室

(4) 質問項目：設問1は、グループ発表のテーマ、種類について（ペープサート、パネルシアター、パペット、劇、その他、から選択する）である。

設問2は、「テーマを決める際に、何を優先して決めましたか。一番の理由に◎、二番目の理由に○、三番目の理由に△を付けてください」である。①子どもの興味関心、②学生の興味関心、③発表内容のしやすさ、④素材からアイデアが浮かんだかどうか、⑤素材の入手のしやすさ、⑥その他、から選択する。

設問3は、「今回の発表で、使用した素材をあげてください」である。大学の方では「素材庫『あとリエ』から活用した素材には○を付けてください」という質問で素材名を列挙してもらった。

設問4は、「1年生ではじめて出会った仲間と意見をまとめる際、沢山の材料があるほうが自分たちの仲間づくりに役立つか？」である。

設問5は、「素材が沢山ある方がアイデアが浮かびやすくまとまりやすいか、それとも浮かびにくくなるか？」である。

以上の設問について4件法で回答を得た。

2.2 倫理的配慮

参加した学生にはアンケートの記述を研究に使用することを説明した。また、アンケートの結果を示す場合、個人が特定できないようにし、かつ個人を批判する内容にならないように配慮した。

3. 結果

3.1 短大の結果

設問1, グループ発表の種類に関する質問で、短大では表1の結果を得た。複数回答をした学生がいたため、回答合計数は、学生数を上回っている。

表1 グループ発表の種類 (短大)

グループ発表種類	人数	割合
①ペープサート	80	76.2%
②パネルシアター	13	12.4%
③パペット	7	6.7%
④混合 (パネル・ペープ)	5	4.8%
合計	105	100%

短大では、ペープサートを選んだ学生が圧倒的に多いことがわかる。

設問2, 「テーマを決める際に、何を優先して決めたか」という質問への回答結果は、表2の通りである。質問では、1番目の理由、2番目の理由、3番目の理由についても聞いたが、2番目の理由を答えなかったり、優先順位が同じ記号を2つ書いたり曖昧な部分があった。また、得られた数値を見ると、1番目の理由の回答の中に理由を選んだ優先順位の傾向が大方現われていると判断されたので、ここでは1番目の理由の回答のみについて考察したい。

表2 テーマ決めの優先順位 (%) (短大)

テーマ決めの優先順位	1位	2位	3位
発表内容のやりやすさ	45.8	17.5	18.6
子どもの興味関心	25.8	15.5	15.5
学生自身の興味関心	14.4	24.7	17.5
素材の入手し易さ, 扱いやすさ	7.2	2.1	13.4
素材からアイデアが浮かんだ	3.1	15.5	6.2
その他	1.0		

優先順位を見てみると、「発表内容のやりやすさ」が優先され、次に「子どもの興味関心」「学生自身の興味関心」・・・と続く。

設問3, 「使用した素材」に関する質問に対する回答は、表3の通りである。

表3 使用した素材 (短大)

素材	使用数 (%)
画用紙・色画用紙	89 (40.1)
割り箸	78 (35.1)
模造紙	12 (5.4)
フェルト	12 (5.4)
Pペーパー	9 (4.1)
折り紙	6 (2.7)
新聞紙	6 (2.7)
段ボール	5 (2.3)
綿	2 (0.1)
竹串, ラップの芯, 磁石	各1 (0.05), 計3

画用紙・色画用紙と割り箸を選んだ学生が多かった。

表4 多数の素材と仲間づくり (短大)

内容	回答数 (%) 97 (100)
役立つ	47 (48.5)
やや役立つ	43 (44.3)
やや役立つたない	3 (3.1)
役立つたない	0 (0)
無効	4 (4.1)

設問 4、素材は仲間づくりに役立ったかという質問に対する回答は、表 4 のようになった。

多数の素材があることで仲間づくりがしやすくなるという回答が圧倒的に多かった。

設問 5、素材が多数あることでアイデアが浮かびやすくまとまりやすいかに対する回答は、表 5 の通りである。

表 5 多数の素材と発想の容易さとまとまりやすさ(短大)

内容	回答数 (%) 97 (100)
浮かぶ	41 (42.3)
やや浮かぶ	44 (45.4)
やや浮かばない	12 (12.4)
浮かばない	0 (0)

やはり、素材が多い方が発想しやすいという回答が圧倒的に多かった。

3.2 大学の結果

設問 1、グループ発表の種類に関する質問で、大学では表 6 の結果を得た。

表 6 グループ発表の種類 (大学)

グループ発表種類	人数 83	割合
① ペープサート	2	2.4%
② パネルシアター	16	19.3%
③ パペット	5	6.0%
④ 混合 (①と②)	34	40.9%
⑤ 劇	12	14.5%
⑥ その他	14	16.9%

混合が一番多い結果となった。パネルシアターとペープサートの混合(写真 1)の他、絵本や手遊びを加えながらの発表も見られた。授業で学んだことを一つ一つ思い出し、できることをいろいろと試みるという姿勢が見られた。

設問 2、「テーマを決める際に、何を優先して決めましたか」という質問への回答結果は、表 7 の通りである。

表 7 テーマ決めの優先順位 (%) (大学)

テーマ決めの優先順位	1 位	2 位	3 位
子どもの興味関心	43.4	28.9	10.8
発表内容のやりやすさ	27.7	28.9	19.3
学生自身の興味関心	8.4	10.8	22.9
素材からアイデアが浮かんだ	8.4	6.0	8.4
素材の入手しやすさ、扱いやすさ	6.0	21.7	24.1
その他	2.4	1.2	2.4

テーマ決めの優先順位 1 位の中で 1 番多かったのは、「子どもの興味関心」である。その項目は優先順位 2 位でも一番多くなっており、学生たちが子どものことを考えながらテーマを決めていることがわかる。子どもが楽しめることを考えながら、取り組んだと考えられる。

一方、「発表内容のやりやすさ」「素材が手に入りやすい」等も上位にあり、発表という課題を目の前に、やりやすさも考慮しながら準備したことがわかる。



写真 1 パネルシアターとペープサートの混合の発表

「素材からアイデアが浮かんだ」は少数派であるが、実際の発表では、昨年も今年も素材をうまく活かしているように感じられるものも少なくない。グループメンバーで話しながら進めていく途中で、アイデアが浮かんできたということもあったのだろうか。例えば、パネルシアターの舞台上に P ペーパーの絵人形を貼るだけではなく、紙の絵人形に糸をつけ、後ろから操作し動きを出していた例、段ボー

ルで大きな卵を作り、後ろに持ち手を付け、二つに割れた卵から学生自身が出てくるという表現をした例、バンダナ、ラップの芯、モール、ビーズ等、様々な素材で絵本の中の蝶を立体的に表現した例など、学生のアイディアは多様だった。

設問3、「今回の発表で、使用した素材をあげてください。素材庫『あとりえ』から活用した素材には○を付けてください。」に関する質問に対する回答は、表8の通りである。結果としては、全部が素材庫の素材であった。

表8 使用した素材 (大学)

素材	回答数 (%)
画用紙・色画用紙	42(37.2)
段ボール	14(12.4)
色ペン	6(5.3)
ガムテープ	5(4.4)
新聞紙, 紙袋, 糸, トイレットペーパー芯	各 4(3.5), 計 16
テープ, 綿, フェルト	各 3(2.7), 計 9
ひも, 割り箸, 竹串, 靴下, 軍手, 布, おはじき, ストロー, Pペーパー	各 2(1.8), 計 18
模造紙, たこひも, 棒,	各 1(0.9), 計 3

表8でわかるように、素材庫「あとりえ」からは、画用紙・色画用紙・段ボール等の紙の素材を中心に、新聞紙、紙袋など様々なものが活用された。

設問4、「1年生ではじめて出会った仲間と意見をまとめる際、沢山の材料があるほうが自分たちの仲間づくりに役立つか?」という質問に対する回答は、表9のようになった。

表9 多数の素材と仲間づくり (大学)

内容	回答数 (%) 83 (100)
役立つ	47 (56.6)
やや役立つ	33 (39.8)
やや役立つたない	3 (3.6)
役立つたない	0 (0)

「役立つ」「やや役立つ」を合わせると8割となった。発表する内容も、使う素材も作るものも決まっていないうちで、素材からの発想を基にしてグループメンバーが話し合いを進めていったプロセスを通じて、グループメンバーのつながりができたと思われる。しかし授業の様子からは、コミュニケーションを取りながらの授業形態を苦手と感じている学生も見受けられ、個別の配慮が必要であると感じた。すべての学生が、仲間と一緒に作り上げる喜びを味わえるよう、授業の進め方の工夫を考える必要があると思われる。

設問5. 素材が多数あることでアイディアが浮かびやすくとまりやすいかに対する回答は、表10の通りである。

表10 多数の素材と発想の容易さととまりやすさ(大学)

内容	回答数 (%) 83 (100)
浮かぶ	51 (61.4)
やや浮かぶ	25 (30.1)
やや浮かばない	7 (8.4)
浮かばない	0 (0)

「浮かぶ」「やや浮かぶ」と合わせると、9割近くになり、多くの学生は「素材が沢山あるほうがアイディアが浮かびとまりやすい」とした。経験の多い保育者が、子どもたちの遊びについて「素材があることで遊びのきっかけができ、遊びの幅が広がっていく」等の回答をしている(植草他, 2017)が、学生も子どもたちと同様、それぞれの学生が素材に触発された発想を検討しながら活動をまとめ広げていったと考えられる。アイディアが浮かぶとまとめるためのアイディアも出やすくなり、結論がまとまりやすい面があると思われる。

一方、「やや浮かばない」「浮かばない」としている学生も1割を超えるという結果となった。自由記述にも書かれていたが、素材がたくさんあることで迷い過ぎて、逆にアイディアが浮かばないという学生もいることがわかった。決まった素材で、決まったものを作る中で、自分の色を少しずつ出していけ

る学生もいると考えられ、学生の個性や経験等も考慮しながら関わる必要があると考えられる。

3.3 短大と大学比較

グループ発表の種類を短大と大学を比較してみると、短大はほぼ8割がペープサートを選択した。一方、大学生は、パペットとペープサートの混合が多い。しかし、4割程度であった。パネルシアターや劇も比較的多く、その他も17%あった。

テーマ決めの優先順位について見ると、短大では、「発表の内容のやりやすさ」(45.8%)、「子どもの興味関心」(25.7%)、の順であったが、大学では、「子どもの興味関心」(43.4%)が一位であり、「発表の内容のやりやすさ」(27.7%)が二位であった。

使用した素材について見ると、短大は、「画用紙・色画用紙」と「割り箸」が大半を占めていた。

一方、大学の方は、やはり「画用紙・色画用紙」が多いが、半分ほどになっている。割り箸に至っては、2人しか選んでいない。使われた素材は、大学計23種類、短大は12種類である。

仲間づくりについて見ると、多様な素材があることで、仲間づくりに役立つかという点については、短大の90人、大学の80人が肯定的な回答を行った。

発想の容易さ・まとまりやすさについて見ると、短大では、8割に近い学生が肯定的な回答を寄せている。大学では、9割の学生が肯定している。

4 全体的考察

4.1 素材の多様性は発想を豊かにし視野を広げる

使用した素材の項目でわかるように、素材庫を活用し、多様な素材に触れた大学生の方が数多くの素材を利用するようになった。選択肢が増えれば、選択する種類が増えるのは自然なことである。

しかし、選択肢としては同じであるグループ発表の種類項目でも、大学は特定の少数の活動への偏りが少なく、しかも、多くの活動を選んでいった。これは、素材の多様さに刺激されて、発想の幅が広がっ

たと考えられる。様々なことができるといった可能性の広がり、グループ発表の種類増加に関係していると思われる。

つまり、素材の多様さと直接関係のないグループ発表の種類についても、異なる選択をするようになったのである。素材の種類面の多様さによる関心の広がり、グループ発表の種類選択可能性の広がりにも波及していると思われる。

4.2 素材の多様性は積極性を増す

また、意識の広がり以外にも、テーマ決めの優先順位を見ると、大学生の方が積極的な決め方をしていることがわかる。短大生は「発表の内容のやりやすさ」のように容易さ項目が一位となったが、大学生では、「子どもの興味関心」が一位となっており、より多く子どもの興味関心に応えようとする積極性がある結果となっている。

もともと短大生と大学生は、異なる集団であるかもしれない。その違いを考えるためには、短大生が素材庫を使い、大学生が使わない場合についても調査すべきであろう。今回は、そこまではできなかった。ただ、今回の調査で素材の多様さが影響している可能性が考えられるので、今後さらに研究を続けていきたい。

4.3 素材の多様性は仲間づくりを促進する

また、素材の多様性は発想を豊かにすることで、話題を多くし、仲間との話し合い・関わりを容易にし、ひいては仲間づくりを促進する可能性も示唆された。多様な素材に接することができた大学生の9割が、多様な素材が仲間づくりに役立っていると答えたのは理解できることである。多様な素材を経験しなかった短大生の約9割も、多様な素材が仲間づくりに役立っていると答えている。これは、日頃の経験から答えたものと考えられる。日頃も考える材料が多いと友達との関わりが深めやすいと感じているものと思われるが、今後の研究でさらに追及していきたい。

4.4 素材の多様性は興味を高める

さらに、多様な素材によって、学生の興味が高まったのではないかとと思われる。例えば、グループ発表の種類項目で考えると、短大生はかなり多くペーパーサートを選んでいる。この項目に関しては、短大生も大学生も選択の幅は同じである。つまり、短大生は選べるのに選んでいないのである。

これはなぜだろうか。推測であるが、素材の選択肢が乏しいので、素材に影響されて豊かな発想が出来なくなり、そのため面白さを感じられず、他の面でも使えるのに使い道を思いつかなかった、選べるものを選ばなかったということと思われる。つまり、素材の選択肢の狭さが、気持ちを消極的にし、興味が喚起されず、使えるモノも使わなくなってしまったのではないか。

この点から、興味・自発性を高めるためにも、多様な素材に接することが大切なのではないかと示唆される。

4.5 学生の取り組み方とインクルーシブ保育

保育者の資質の面から、今回の結果を検討してみよう。安藤ら(2015)は、保育者には、子どもの予測できない行動に対する柔軟な対応力が重要であると指摘した。そして、ロールプレイングの手法を用いて柔軟な対応力を身に付ける方法を提起した。今回の素材庫による多様な素材との触れ合いも、柔軟な対応力を身に付けることの一助になることが期待できる。

多様な素材と触れ合うことで発想が豊かになり、様々な可能性が見えてくるようになり、様々な状況に際しても豊かな発想の経験を生かして、状況に合った適切な対応が可能になるのではないかとと思われる。

また、幼児に関して、素材庫を作ることで幼児の発想が豊かになり、かつ遊びを発展させやすくなり、様々な個性をもった他児との関わりが深まることがわかった。素材庫の存在によって、幼児自身の自発的活動が盛んになり、異なる個性をみんなの活動の

中に巻き込んでいくインクルーシブ保育が実現しやすくなったと考えられる(植草, 2016)。

同じようなことが学生に対しても該当しそうである。当然、インクルーシブ保育の推進のためには、保育者もインクルーシブ保育の理念に合致した心構えをもたなければならない。インクルーシブ保育では、障害のあるなしを前提とせず、多様な子どもが自分のニーズに合った保育を受けられるものである(園山・藤原, 2017)。つまり、子どもを多様な個性をもった存在としてみて、それぞれの子に合った保育ができることが大切なのである。その前提として、保育者がバラエティーに富んだ見方をし、子どもに合わせたアイデアを選べるようになることが大切と思われる。

素材庫によって多様な素材に触れ、豊かな発想を可能にしていく教育は、まさにインクルーシブ保育を行う保育者の資質を確保するために役立つものと思われる。

インクルーシブ保育を行う保育者の資質として、山本・山根(2006)は、保育者には、「子どもの発達理解を基盤に障害に関する知識やその特性に合わせたかかわり方等の技術が求められる」と述べている。これは、保育士の専門性に関わる資質と考えられる。

一方、本研究者の言う「豊かな発想」は、多様な視点を生み、様々な個性を受け入れ生かすための基盤となる資質と考えられる。専門的な知識や技能も、それに基づいて多様な発想・応用ができることで、変化に富んだ現場のニーズに応えられる「知識・技能」になる。いわば、インクルーシブ保育を行うための人間的資質に結びつくものである。本研究者は、人間的資質を築きつつ、専門的資質(知識・技能)を身につけることが大切と考えるのである。

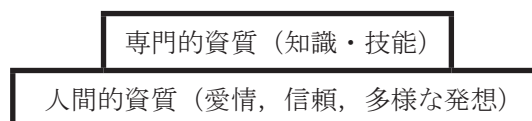


図1 人間的資質と専門的資質

4.6 豊かな発想を育てる教育

豊かな発想ができるためには、多様な素材が重要であることを検討してきた。しかし、もちろん多様な素材だけが発想を豊かにする要因ではない。様々な状況に遭遇して多様な経験を積み重ねていくことも、豊かな発想のためには大切なことである。また、たとえ素材が少なくても、多面的な見方をすることで豊かな発想を生み出すことができる。例えば、1つのモノも違った発想をすることで、本来の使い方とは異なる使い方ができるようになるなどの柔軟性が必要である。

ただし、多様な経験を積み重ねるためには時間がかかる。むしろ保育の現場に出てから、様々な子どもや様々な状況に遭遇して豊かな経験が積み重なって育っていくものと思われる。このような豊かな経験とまでは行かないが、今回の多様な素材による豊かな発想は、一つの出発点と考えられる。つまり、様々な状況に対処できる発想を生み出す素地になると想定される。だから、現場に出てからうまく新しい状況に対応できるように、学生時代にこのような豊かな発想を経験しておくことが必要と思われる。

また、一つのモノを多面的に見ることは、発想力が乏しい者にとっては困難なことと言える。そのため乏しい材料に対する多面的な見方ができるための出発点としてまず、多様な素材によって豊かな発想ができる経験をしていただいた方が良く考えられる。

環境に触発される豊かな発想と多様な経験による発想、多面的なものの見方の関係については、まだ仮説の段階である。その解明についてはこれからの課題としたい。

4.7 多様な素材の弊害

本論でも触れたが、多様な素材があることで迷い、混乱する学生が少数ながら存在する。異なる材料が多く存在するために、まとまりのあるものを仕上げるのが困難になってしまう学生と考えられる。このような学生も迷い考えることで次第に豊かな発想をまとまった形で活用する力を育てていくことにな

らるだろう。従って、多様な素材に触れながら、豊かな発想を活かす仲間の中で発想を産み出すことの快感を味わい豊かな発想の経験を重ねていくことが必要であろう。

しかし、中には強く困惑する学生もいるかもしれない。そのような学生には教員の支援が必要になるであろう。

多様な素材を与えればすべて良しということではなく、環境を整えた後も、教員は学生のニーズを見極めながら学生の教育にあたっていくことを怠ってはならないのである。

5 結論

インクルーシブ保育を行える保育者を養成するためには、多様な見方や豊かな発想ができるようになることが保育者の資質として求められる。素材庫を活用した保育教材作成の授業は、多様な発想を可能にすることが示唆され、保育者の資質を養成することに貢献すると考えられる。ただ、素材庫は一つの機会の提供にすぎない。保育者養成の過程で学生は、多様な素材、絵本、玩具、環境、意見、考え方に触れていくことが大切と思われる。つまり、保育者養成の場が豊富で多様な刺激にあふれた場になることが何よりも大切と思われる。このような場をいかに実現し、活用していくかということについては、これからの課題である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、植草学園短期大学の授業「保育の表現技術（言語表現）」の担当であり、幼保連携型認定こども園植草学園附属弁天こども園副園長鈴木朱美氏には、多大なご協力を得ました。植草学園大学・植草学園短期大学の学生には、アンケート調査に協力していただいた。ここに記して感謝申し上げます。

文献

- 安藤則夫・馬場彩果・植草一世・加藤悦子・栗原ひとみ (2015). 「保育者を目指す学生の柔軟な対応力—幼児の多様で想定外の行動に対処できる心構えの形成—」 植草学園大学研究紀要, 7, 69-78.
- 植草一世 (2016). 「大学附属幼稚園における保育の質を高めるための取り組み—子どもの遊びを活性化させるための素材活用—」 植草学園大学研究紀要 8, 39-50.
- 植草一世・安藤則夫・馬場彩果・谷信子・鈴木朱美・尾形光穂・栗原ひとみ・広瀬由紀 (2017). 「子どもの遊びを活性化させるための素材庫 (アトリエ) の可能性」 植草学園大学研究紀要, 9, 29-39.
- 植草一世・安藤則夫 (2018). 「インクルーシブ保育のた
- めの『あとリエ』の可能性—エピソード記録からの考察—」 植草学園大学研究紀要, 10, 43-50.
- 中央教育審議会 (2012). 「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—答申」, 文部科学省.
- 園山繁樹・藤原あや (2017). 「幼児期のインクルーシブ教育・保育に関する—考察—「幼稚園教育要領」と「保育所保育指針」記載事項の変遷を中心に—」, 人間と文化, 1(1), 221-226.
- 山本佳代子・山根正夫 (2006). 「インクルーシブ保育実践における保育者の専門性に関する—考察—専門的知識と技術の観点から—」, 山口県立大学社会福祉学部紀要, 12, 53-60.

Abstract

Variety of Materials and Creativity in Child Care Course Students: Significance of Utilizing a Storehouse of Materials.

Norio Ando^[1], Kazuyo Uekusa^[2], Midori Sonokawa^[3]

[1] Faculty of Child Development and Education, Uekusa Gakuen University

[2] Department Welfare, Uekusa Gakuen Junior College

[3] Faculty of Modern Life, Teikyo Heisei University

The teachers involved in this paper have been studying the educational effects of using a storehouse with various materials. It was found that the presence of a variety of materials promoted the imagination of children, their play activities, and the diversity of children they interacted with, while at the same time facilitating inclusive education for young children. The intention of this study was to verify the utility of a storehouse for the education of students of a childcare course by comparing two classes of Childcare Expressive Arts, one of university students who were using the storehouse and the other of junior college students who were not. A questionnaire was administered to the students, and the results showed the variety of materials as facilitating the students' ability to produce many divergent ideas as well as positive attitudes towards the activities. The production of diverse ideas and a positive attitude for the activity in question are thought to be important qualities for childcare workers. Therefore, it was concluded that using the storehouse of various materials in a class of Childcare Expressive Arts is useful for the education of students.

Keywords: storehouse with various materials, producing divergent ideas, positive attitudes towards the activities, the qualities of childcare workers, inclusive education.